［３］研究開発単位Ⅲ「SOZAN 国際塾」

（１）１年間の取組

月	主な取組み
4	新入生歓迎会でのプレゼンテーション、岡山大学 SDGs アンバサダーへの登録
5	Sacred Heart College オンライン交流会、グローバルスキルトレーニング
6	Sacred Heart College オンライン交流会、高校生国際会議準備委員会、グローバルスキルトレーニング
7	オープンスクールでのプレゼンテーション、グローバルスキルトレーニング、Sacred Heart College オンライン交流会、
8	超異分野学会大阪大会、グローバル合宿、Sacred Heart College オンライン交流会、岡山大学留学生とのオンライン交流会
9	岡山大学留学生とのオンライン交流会、共生の地球社会へ地球憲章の目指すインクルーシブな世界 in 岡山大学、スタンフォードビジネススクールからの学生との交流会
１０	サスティナブルブランド国際会議　中国ブロック大会、グローバルスキルトレーニング、岡山大学留学生とのオンライン交流会
１１	グローバルスキルトレーニング、岡山大学留学生とのオンライン交流会、サステナブルフェスタ in 岡山大学
１２	高校生探究フォーラム、全国高校生フォーラム、グローバルスキルトレーニング、岡山大学留学生とのオンライン交流会、第１回西播磨ビジネスプランコンテスト、サイエンスキャッスル中四国大会 2023
1	第５回探究活動プレゼンテーションアワード、岡山城東高校課題研究発表会・成果報告会、グローバルスキルトレーニング、岡山大学留学生とのオンライン交流会
2	高校生国際会議、未来航路課題研究発表会、グローバルスキルトレーニング、岡山大学留学生とのオンライン交流会、第１回 steAmBAND 学びの協奏コンテスト
3	第６回サイエンス研究会

（２）取組実践

「持続可能な開発目標(SDGs)」における１７の目標に基づいたテーマで課題研究を行った。意欲ある生徒を対象に、幅広く深い教養、課題発見・解決能力、新たな価値を創造する力、主体的に行動する力、他者と協働する力、自他を尊重する力の６つの資質と能力を身につけ、グローバル社会で活躍できる生徒を育成するために、なるべく多くのインプットやアウトプット、フィードバックの機会を生徒に与えるように様々な活動の機会の提供を図った。校内では課題研究の進め方に関する講座を複数回開催し、研究のプロセスやリサーチクエスチョンの設定の仕方、研究計画書の作成の仕方、情報収集・分析の仕方、倫理的配慮に関する注意事項の確認など、課題研究を進めていく上で必要な知識・技能を習得する機会を設けた。また、未来航路（総合的な探究の時間）の時間を利用して研究の進捗状況を担当教諭に報告・フィードバックを受ける機会を設

けた。ポスターや論文、プレゼンテーション資料等については、Classroom を通じて提出を求め、指導・助言・添削を行い、進捗状況をこまめに確認するように努めた。

今年度は大学や関係機関等が主催するイベント・プログラム・セミナー・発表会等に計２０件参加した。また、校内研修会の機会も大いに拡充させることに成功した。外国人教員によるグローバルスキルトレーニングを年間通じて１０回程度実施し、英語運用能力のさらなる向上を図るとともに、外国語の文献を利用して調査・研究を行う方法、異文化間における情報の扱われ方、英語でのディスカッションの進め方など、国際社会で活躍していくためのスキルや知識を学ぶ機会を充実させた。また、オンラインを通じて本校の姉妹校である Sacred Heart College や、岡山大学の留学生との交流会を行い、国際交流の機会も絶やさないように努めた。これに加え、校内外での発表の場への参加も積極的に促し、課題研究の成果を外部に向けて発信することで、自身の探究活動が社会に貢献することにつながることを伝え続けた。他校の生徒や教職員、大学関係者や各種業界・企業で活躍される方々からフィードバックをもらい、それらをもとに客観的に自身の課題研究を見直し、深化させるに至った。また、参加後には振り返りを書かせることで、自身の体験や学びを内在化し、整理した上で次に活かすことができるようにした。

（２）－１　校内での取り組み

・校内研修会の充実

２年生は１年次の段階で課題研究と調べ学習の違い、課題研究のプロセス、リサーチクエスチョン・仮説の立て方、研究計画書の作成の仕方、調査・分析方法に関する校内研修を受け、研究計画の作成を経て、探究活動の実践の段階にあった。２年生の課題研究の進捗状況に応じて、各グループが求める内容に対応させる形式で、グループごとに指導を行った。

・オンラインを通じた国際交流の機会の拡充

今年度も昨年度に引き続き、Sacred Heart College(SHC)からの本校訪問は叶わなかった。しかし Chromebook を活用し、計４回にわたり、オンラインでの交流会を開催した。前半は互いの学校生活や個人にかかわること、文化などを話題に交流を重ね、後半は課題研究の内容について意見交換をする機会を設けた。また、SHC のみにとどまらず、岡山大学の留学生とのオンライン交流会も年間１０回にわたり実施した。初回は留学生の出身国について学ぶ機会を設け、２回目以降は各グループが取り組んでいる課題研究の進捗状況を伝え、フィードバックをもらう機会を得た。自身のことや取り組みについて英語で説明する機会を通じ、英語運用能力の向上を図るとともに、グローバルな視点から課題研究に向き合う大変有意義な機会になった。

・グローバルスキルトレーニング（GST）の実施

今年度も一昨年度に引き続き、６つの資質能力向上及び、英語力の向上のため、外国人教員によるグローバルスキルトレーニングを実施した。年間通じて１０回の講座を開催し、各回において複数の国際塾生が参加した。本校のネイティブの英語教諭により、国際塾生の資質能力向上の

ため、毎回多岐にわたるトピックで講座が実施された。具体的な内容としては、グローバル人材やグローバルスキルとは何かを考えさせる講座、異文化について学ぶ講座、ICT を用いた課題研究の工夫を学ぶ講座などである(以下「令和５年度のグローバルスキルトレーニングの講座内容」を参照)。実施後に行ったアンケートの結果によると、回答者の 85%は「グローバルスキルトレーニングがとても役に立った、役に立った」を答えた。「色々なスキルを身につけることができ、好奇心がくすぐられた」、「自分の意見を考えながら参加できた」「データ活用の授業は情報の分野にも通ずるところがあり、とても参考になった」、「自分たちで表を作り、データを調べたりすることは情報処理にも役に立ち、楽しかった」との声が複数の受講生から上がった。

＜令和５年度のグローバルスキルトレーニングの講座内容＞

実施回	日程	内容
1	５月２２日（月）	自己紹介、「インターネット検索活動」グループワーク、ディスカッション
2	６月１２日（月）	英語によるプレゼンスキルの紹介、ディスカッション
3	７月１０日（月）	与えられたトピックについて短時間の準備で数分間の発表をする「即興プレゼン活動」
4	１０月１６日（月）	上記の続き
5	１０月２３日（月）	「政治家として新しく設立したい国内外祝日を提案する」をテーマにしたプレゼン。
6	１１月１３日（月）	全国高校生フォーラムの発表者による発表リハーサル・質疑応答
7	１２月１１日（月）	国際機関のデータから見えてくる課題分析と英語発表［1］ ウェブサイト閲覧･収集したデータを Google Spreadsheet で分析
8	１月１５日（月）	国際機関のデータから見えてくる課題分析と英語発表［2］「発表の準備」
9	１月２２日（月）	国際機関のデータから見えてくる課題分析と英語発表［3］「発表本番」
10	２月５日（月）	視野を広げる：「在日本外国人が向かっている課題」 出入国在留管理庁のデータからわかる推移・現状を把握

（２）－２　外部との連携

・外部発表会への参加

今年度は様々なものが再び対面開催がされるようになった。高校生探究フォーラム、全国高校生フォーラム、超異分野学会大阪大会、第４回探究活動プレゼンテーションアワード、第５回探究活動プレゼンテーションアワード、岡山城東高校課題研究発表会、多くの発表の場に恵まれ、課題研究の成果を外部に向けて発信することができた。発表の機会を通じて自身の課題研究を見直し、ブラッシュアップする機会になっただけでなく、他校の生徒からも大いに刺激を受け、考え方やものの見方を広げることができた。

〇全国高校生フォーラム

１２月１７日（日）に対面で開催された全国高校生フォーラムに２年生３名が参加し、「Improving Disaster Prevention Awareness for All People in Japan」というテーマで発表した。当日はプログラム前半に、全国の他校の参加者たちとの交流会が行われた。そこでは“Cultural Diversity”をもとに英語を使用言語としてグループに分かれてのワークショップが行われた。後半のポスターセッションでは、各校の発表の概要を英語で説明し、それに対する大学教授からの講評・質疑応答が行われた。生徒たちはこの日のために、何度も研究内容を精査し、修正と練習を重ね、入念に準備を行った。入賞こそは逃したものの、教授陣からは「視点がいい」「実際にどこで配布しようと思っているのか」「何部用意したいのか」「課題研究する中で苦労したところはどんな点か」等と好意的な講評をいただいた。

〇全国高校生フォーラム　発表要約

日本語テーマ

日本にいるすべての人が持つ防災意識の向上を目指す

日本語要約

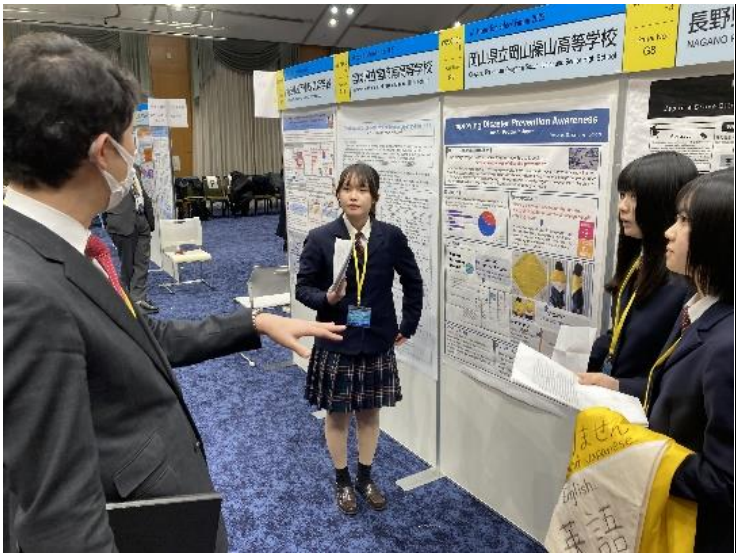
災害大国である日本において、私達は外国からの留学生や観光客といったすべての人が安心して日本で暮らせるようにするという目的のもと、彼らの防災意識の向上を目標としている。そこで考えたのが、外国人向けの防災マニュアルである。その中で特に、日本語での会話が難しい方へ向けた、速やかな避難を可能にする製品「多言語コミュニケーションバンダナ」を開発、制作した。こうして日本を住み続けられるまちにすることを目指す。

英語テーマ Title

Improving Disaster Prevention for All People in Japan

英語予約 Outline

In Japan、 which is a disaster-prone country、 we aim to raise disaster-prevention awareness among foreign students and tourists、 for the purpose of allowing them to live a safe and secure life in Japan. With this in mind、 we came up with the idea of making a disaster prevention manual for foreign people. We developed and created “The Multilingual Communication Bandana”、 which enables prompt evacuation of people who have difficulty in communicating in Japanese. In this way、 we hope to make Japan an easier place in which to live、 in accordance with SDG 11.



Improving Disaster Prevention Awareness

for All People in Japan

Okayama Sozan High School

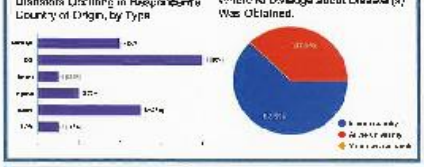
[QUESTION and SITUATION]

Do foreign people living in Japan, foreign students and tourists **have an awareness of disaster prevention**?

Japan is a disaster-prone country. **172** foreign people died in the Great Hanshin-Awaji Earthquake and **41** in the Great East Japan Earthquake. Even when translation tools are available during disasters, foreign people are often unfamiliar with disasters. As a result, they may not have sufficient knowledge regarding evacuation, or be able to take appropriate action simply by translating Japanese into their primary language.

[SURVEY]

We interviewed Okayama University International students.

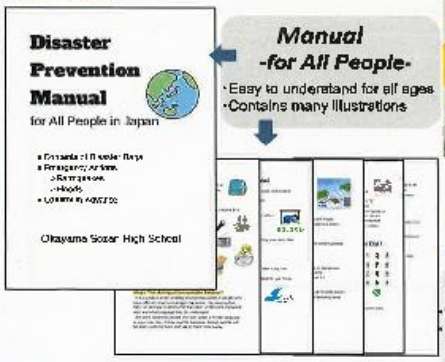


[PROPOSAL]

Make a disaster prevention manual and distribute it at the airport to all foreign people entering Japan.

Airports are places that all foreign people pass through. By making it compulsory to distribute manuals and check them, all foreign visitors to Japan may be able to gain knowledge about disasters that occur here.

[METHOD]



Manual -for All People-

- Easy to understand for all ages
- Contains many illustrations

"BOND"

-Bandana Of Notable Disaster relief-

Multilingual Card

- written in 11 languages
- 10 phrases they might need at an evacuation center

[CONCLUSION]

- **BOND** can make it easier for people whose native language is not Japanese to evacuate during disasters.
- As more visitors come to Japan, the range of people who can be helped by BOND will expand.

[FUTURE ACTIONS]

- Reconsider whether it is possible to distribute manuals or manufacture bandanas and implement them.
- Attach flashing lights and a reflector to bandana.

○高校生探究フォーラム

１２月２６日（火）に開催された高校生探究フォーラムのポスターセッション部門に２年生１グループ（３名）が参加した。２年間にわたって行ってきた課題研究の成果を他校の生徒、教職員、大学教授、専門家等を前に発表した。発表後には活発な質疑応答が行われ、自身の研究の意義や今後の展望を見つめる大変良い機会となった。発表後に寄せられたアンケートには、多角的な視点から研究がなされていること、自分たちでインタビューに行くなど情報収集がしっかりとなされていることを評価する多くの声が寄せられた。

○岡山城東高校課題研究発表会

岡山県立岡山城東高等学校課題研究発表会に２年生より１グループ３名が参加した。自身の課題研究の成果を、スライド資料を用いたプレゼンテーションの形式で岡山城東高校生、教職員、大学教授の前で発表した。教室に入りきらないくらい多くの人々に見に来ていただき、発表後には活発な質疑応答が行われた。普段はなかなか関わることのできない他校の生徒との交流を通じて、課題への様々なアプローチの仕方、社会問題を知るきかっけとなった。

＜発表概要＞

研究テーマ：

ゲームと学習能力向上の関係性について

概要：

一般的に娯楽ゲームは子供の成績に悪影響を与えると危惧されている。しかし、「勉強に手がつかなくなるほど」の影響力を持つゲームを逆手に取り、ゲームを学習材料として活用すると学習能力向上に寄与するのではないか、もしそのようであれば具体的にはどのような影響があるのかを研究することにした。

ゲームと学習能力向上の関係性について

県立岡山操山高校　2-6-3 伊賀遥香　2-7-2 伊丹遥音　2-3-10 岡田あかり

1.テーマに関する概要説明

お子さまがゲームをすることで生じている問題はなんですか？(複数回答可)

「ゲームは子供の勉強に影響を与える」
と考えている人が多い。

2.検証すべき論点の提示

①ゲームは知能に影響を与えるのか。

②①の場合、具体的にはどのような影響があるのか。

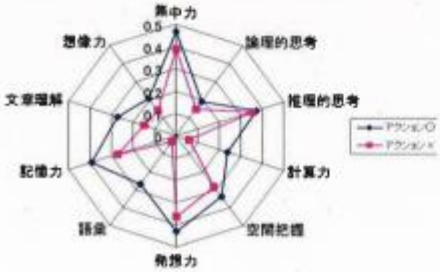
3.個々の重要情報の検証プロセスの提示

①ゲームは知能に影響を与えるのか。

私たちの最も重要な発見は、ゲームが知能の変化量にプラスの影響を与え、9～10歳でより多くのビデオゲームをプレイした子供が 2年後に最も知能が向上したということでした。

The effect of digital game experience on cognitive ability.より

②仮にゲームが知能に影響を与える場合、
具体的にはどのような影響があるのか。



付図4　アクションゲームと能力の関係

ゲーミフィケーション

ゲームの要素をゲーム以外の物事に応用する取り組み。
参加者を熱中させ、学習へのモチベーションを高めることにつながる。

4.ゲーミフィケーションの実験

Aパターン・・・マッチッチ*神経衰弱1回プレイ
Bパターン・・・アクションゲーム一回プレイ
Cパターン・・・ゲーム関連のことを行わない
午前8時にそれぞれ上記のことを行った後、5分単語帳を見る→午後8時単語クイズを(10問×2)行う

	おさかな	のりもの	子供の遊び
Aパターン	9+10/20	9+9/20	10+10/20
Bパターン	10+8/20	9+8/20	9+10/20
Cパターン	8+7/20	8+8/20	9+7/20

＊マッチッチとは…
英単語を「見て・聞いて・遊んで」覚える神経衰弱カードゲーム

5. 結論

①ゲームは知能にプラスの影響を与える。

②ゲームをすると、さまざまな能力が向上し、作業記憶容量が増加するということが先行研究から明らかになった。

⇒よって、ゲームは種類によって様々な能力を底上げする

③ゲーミフィケーションというゲームの要素を利用し、ゲーム以外の分野にその特性を利用するという活動が実際にされていることがわかり、実験からもその効果は明らかになった。

6.参考文献

LITALICO発達ナビ https://h.navi.jp/column/article/35027024/3#headline_154103

東北大学 電子ゲームが学力に与える影響

The effect of digital game experience on cognitive ability.
https://core.ac.uk/download/pdf/233124955.pdf

〇探究活動プレゼンテーションアワード（岡山県立玉島高等学校）

１月２７日（土）には第４回探究活動プレゼンテーションアワードが開催され、２年生１グループ３名が参加した。自身の課題研究の成果を、ポスタープレゼンテーションの形式で岡山県の高校生、教職員、大学教授の前で発表した。発表のあとには活発な質疑応答が行われた。普段はなかなか関わることのできない他校の生徒との交流を通じて、課題への様々なアプローチの仕方、社会問題を知るきかっけとなった。

・大学との連携

８月９日（水）、１０日（木）の二日間にわたり、昨年度同様、関西学院大学の協力のもと、グローバル合宿を開催した。新型コロナウイルスの影響を鑑み、しばらく本校及びプラザホテルにて実施していたが、本年は関西学院大学での開催を復活させることができた。関西学院大学において実際に行われている「国際情報分析」を、講義や実習、発表等を通じて学んだ。本校より１３名の国際塾生が参加した。初日は、本校にて大学教員による国際情報分析の方法及び意義についての講演をいただいた後、テーマ別に３つのグループに分かれ、グループごとに大学教員・企業人・大学院生の指導のもと、Chromebook や書籍を利用して調査・分析・発表資料の作成を行った。二日目は本校にて分析・発表準備の続きを行い、午後にはグループごとにスライド資料を用いたプレゼンテーションを行った。最後にグローバル合宿に携わってくださった講師陣より指導・講評をいただいた。本合宿を通して、一つの物事を多角的に見ることの重要性を、実践を交えながら学ぶことができ、大変充実した二日間を過ごすことができた。

＜テーマ一覧＞

・日本に輸入されている食糧は子供に食べさせたくない?

・WHO のパンデミック宣言は本当に信頼できるのか？

・地球温暖化説は本当か？

〇参加した生徒の感想（抜粋）

・昨年もこの合宿に参加させていただき、とても刺激をもらえた充実した時間だったので今年も参加させていただきました。普段の勉強とは違って、1 つのテーマの答えを導くために、自分たちで疑問をもち、その解決のためにあらゆるところから情報を集め、友達や先生と話すうちにまた新たな疑問が生まれ…という、人が本来持っている「学びたい！知りたい！」の気持ちに気づかせてくれるようなとても有意義な時間でした。来年もできることなら参加したいくらいですが、今回学んだことを日常でも意識しながら、情報に踊らされない人になりたいと思いました。

・情報活用能力の重要性を理解した。ただ講義を聞くだけや本を読むだけではここまで知識が身になることはなかったと思う。また、一日中ずっと同じ課題に向かって意見交換をし、夜中まで共に作業をすることで、仲間どうしの絆も深まったように感じる。

・海外との連携

昨年度と同様にオンラインを通じてオーストラリアにある姉妹校の Sacred Heart College(SHC)との交流を行った。今年度の交流会は５月～８月にかけて計３回行い、Google Meet というアプリを活かし、少人数で双方向のやりとりができる環境を整備した。国際塾生と SHC の 13 名の日本語学習選択者と活発に交流を行った。自己紹介や互いの国・学校生活についての理解を深めるところから、取り組む課題研究の内容に関する情報交換など、話題は多岐にわたり、英語と日本語を交えて有意義な時間を過ごすことができた。事後に行ったアンケートの記述式回答において、「同世代の海外の人と会話をする機会があり、よかった」、「自分が英語で話すことだけでなく、相手も日本語で話してくれる機会は殆どないため、貴重な経験だった」、という感想を持つ生徒もいた。選択肢での回答において 70%以上は「よかった」または「とてもよかった」と評価した。

＜令和５年度 SHC との交流会の日程と概要＞

実施回	日程	内容
1	5 月 19 日（金）	本校生徒による自己紹介（英語）・SHC 生徒による自己紹介（日本語）日常会話（相手を知る Q&A）（英語・日本語）
2	8 月 8 日（火）	学校生活・異文化についてディスカッション（英語）
3	8 月 23 日（水）	本校生徒による自分の課題研究テーマの説明・質疑応答　（英語） 本校と SHC 生徒で組んだグループで、制限された時間内に、互いの学校・文化について情報共有ゲーム（英語）

〇姉妹校訪問

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、しばらくオーストラリア南オーストラリア州アデレード市にある姉妹校、Sacred Heart College への訪問が途絶えていたが、今年度はようやく再開される。本校１、２年生から選抜された１２名を代表とし、３月１５日（木）～３月２３日（土）の日程で訪問する予定である。

姉妹校の通常授業に入って、現地の生徒と同じ空間で同じ内容を受ける予定で、是非日本人としての視点や意見を求められる機会に身を置いてもらいたい。短期間ではあるが、日本語を忘れるぐらいの心づもりで、ぜひ帰国後の生活に活かしてもらいたい。

研修日程（調整途中）

月日（曜）	地名	現地時刻	予定	宿泊
3 月 15 日（金）	岡山駅集合	5:45		
	岡山駅出発	6:01	のぞみ 74 号	
	新大阪駅着	6:49		
	新大阪駅発	7:15	はるか 7 号	
	関西国際空港着	8:15		
	関西国際空港発	10:10	SQ619 便	昼：機内
	チャンギ国際空港着	16:05		夕：機内
	チャンギ国際空港発	23:40	SQ279 便	
3 月 16 日（土）	アデレード空港着	9:05	到着後、入国手続き	朝：機内
	アデレード空港発	11:30		昼：－
	姉妹校着	12:00		夕：家庭
3 月 17 日（日）	姉妹校		プログラム内容は姉妹校間で調整中	ホームステイ 食事も家庭で
3 月 18 日（月）				
3 月 19 日（火）				
3 月 20 日（水）				
3 月 21 日				

（木）				
3 月 22 日 （金）	姉妹校発 アデレード空港着 アデレード空港発 チャンギ国際空港着	7:30 8:00 10:35 15:10	 SQ278 便 	朝：家庭 昼：機内 夕：機内
3 月 23 日 （土）	チャンギ国際空港発 関西国際空港着 関西国際空港発 新大阪駅着 新大阪駅発 岡山駅着	1:30 8:35 10:16 11:06 11:32 12:17	SQ618 便 到着後、入国手続き はるか 14 号 のぞみ 121 号 	朝：機内 昼：－ 夕：－

〇岡山大学留学生との交流会

昨年度に引き続き、岡山大学の留学生との交流会をオンラインにて実施した。今年度も、岡山大学の留学生の３名と年間１０回にわたり交流を行った。留学生の出身国は中国、ケニア、ガーナである。初回は各留学生から英語で自己紹介と自国文化等に関する紹介がなされた。生徒たちは留学生のプレゼンテーションに対して英語で質問し、当該国とその文化について学びを深め、視野を広げることができた。第２回以降は、Meet というアプリを活かし、３グループに分けて少人数でグループごとに少なくとも２０分間の交流を行った。生徒は自身が取り組んでいる課題研究の内容について英語で留学生に説明し、留学生からの指導・助言を受けた。実際に大学で研究を行っている留学生たちからグローバルな視点で課題研究に対する助言をもらえる大変貴重で有意義な機会となった。留学生との交流に関しては、１つのグループが３名の留学生から意見をもらえるようにするために、３回ごとにローテーションを行った。生徒たちは毎回ディスカッションの初めに、課題研究の進捗状況と次の取り組みを報告した。課題研究発表会の前に、その内容を留学生の前で披露し、指導・助言を仰ぐグループもいた。課題研究を深化させる上で大変良い機会になった。事後に行ったアンケートの記述式回答において、「色々な国の文化や特色を知れてよかった」、「私たちの研究課題（芸術教育）について他国の授業内容を聞きながら日本との違いを考え、会話ができた」、という感想を持つ生徒もいた。

■日程・内容

実施回	日程	内容
1	8 月 18 日（金）	岡山大学留学生による自国紹介と生徒による質疑
2	9 月 15 日（金）	ステージ 1、第 1 回 課題研究を紹介し、質疑対応・意見交換・助言
3	10 月 20 日（金）	ステージ 1、第 2 回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
4	11 月 2 日（木）	ステージ 1、第 3 回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
5	11 月 17 日（金）	ステージ 2、第 1 回 課題研究を紹介し、質疑対応・意見交換
6	12 月 8 日（金）	ステージ 2、第 2 回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
7	12 月 15 日（金）	ステージ 2、第 3 回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
8	1 月 12 日（金）	ステージ 3、第 1 回 課題研究を紹介し、質疑対応・意見交換
9	1 月 19 日（月）	ステージ 3、第 2 回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言
10	2 月 2 日（月）	ステージ 3、第 3 回 課題研究の変更・取り組みに対する意見・助言

（２）－２　各種校外への講義への参加

・様々な外部講義への参加

今年度も岡山大学 SDGs アンバサダーとして、国際塾生がオンライン等を通じて行われる各種イベント、講演会、ディスカッションに参加した。これに加え、サスティナブルブランド国際会議中国ブロック大会、超異分野学会大阪大会、共生の地球社会へ地球憲章の目指すインクルーシブな世界 in 岡山大学、スタンフォードビジネススクールからの学生との交流会、サステナブルフェスタ in 岡山大学、第１回西播磨ビジネスプランコンテスト、サイエンスキャッスル中四国大会 2023、第１回 steAmBAND 学びの協奏コンテストなど多種多様なイベントに多くの国際塾生が積極的に参加した。どのイベントも第一線で活躍する専門家から直接学ぶことができ、具体的な課題を与えられ、それについて考え、発表するなど、受け身で聴講するだけではなく、自ら能動的に関わっていく中で社会の諸問題を自身の課題として考え、それらの機会を通じて考えたことを自分の言葉で発信する機会となった。６つの資質能力の向上に大きく貢献する内容であった。

（３）「成果と課題」

（３）－１　成果について

今年度も多くの塾生が、各種イベント・発表会等を通じて幅広く深い教養を身に付けることができたと回答している。自分が取り組んでいる分野に関する知識はもちろん、課題研究の内容とは必ずしも直接リンクすることはなくとも、自身の興味や関心に応じて様々な情報収集、研修の機会を利用する中で、新たな教養を身に付けることができた。また、校内外をはじめ、他者との協働を通して自他を尊重しながらも主体的に行動し、リーダーシップやフォロワーシップを養うことができたという報告も、複数の行事を通じて挙げられている。積極的に他者と関わったり、人前で自分の意見を発信したりするのが苦手な生徒も、立場や考え方の異なる多くの人々と一つの課題に協力してアプローチしていく中で、自分の役割を見出し、その環境に自然と参画していくことができたと述べている。他者とかかわっていく中で、社会で問題になっている課題を見つけ、複数の情報をもとに解決策を導いていく力や社会的事象に対して新たな価値を創造する力を身に付けることができたと報告する塾生も多い。

今年度は様々な行事が対面方式の実施となる中で、継続的な情報発信を行い、活動を絶やさないようにした成果が表れているのではないかと考える。また、Classroom を通じて情報発信や担当教員とのやりとりをすることで、時間や場所の制約を受けることなく密度の高いやりとりを行うことができ、手厚い指導につなげることができた。これに加え、今年度は２０件の発表会・セミナー・イベントに国際塾生が参加し、学校での活動だけでは得られない経験や刺激を得ることができた。グローバル合宿での貴重な体験を始め、多くの外部の講義への参加等が功を成したと考えられる。さらに、今年度は校内外において昨年度よりも多くの発表の機会を与えることができ、それに合わせて研究を進め、グループで発表の整合性を確認し、発表からのフィードバックを得て、内省し、研究を深めるという良いサイクルを作ることができたことも６つの資質能力の向上に貢献できた。社会的な問題について自分のこととして考える傾向も見受けられ、どの塾生

も社会貢献の意識を身につけることができたと言えることも今年度の大きな成果といえる。

（３）－２　課題について

国際塾生に対して研究を行う際、安易に校内でのアンケートやインタビュー等に頼るのではなく、信憑性のあるデータを複数集め、根拠をしっかり示すことのできる論理的説得力のある研究を行うこと、データの出典を確認し、複数の情報から多角的な視点で情報分析を行うことを指導してきた。論文の検索の仕方や海外の文献の探し方についても指導する機会を設け、自分たちが考えた仮説や結論とは相反する結果が得られたとしても、それらに真摯に向き合うことの重要性を伝えてきた。そのため、インターネットや文献からのデータを使う際、情報源を確認しながら複数の情報を突き合わせて研究に生かしていくことができている。

今後の課題としては、フィールドワークやインタビュー、実験等の外部機関と連携した研究が十分にできていないため、必要に応じてオンライン等も効果的に活用しながら研究の糸口を探っていく必要がある。また、自分たちで作成した成果物や分析した結果を、学校内で完結させるだけではなく、専門家のもとに持って行き、評価や指導・助言を受けるといった取り組みもこれまではあまり行うことができていないため、実践していく必要がある。また、情報を分析する場面で、様々ある分析方法のうち、どの方法を用いて分析を進めれば良いのかが分からず、苦戦している様子が見られたり、せっかく収集した情報をうまく分析したりことができずに、自身の課題研究に十分に活かすことができていない場合もあった。今後は分析方法について指導する時間を拡充し、実践や演習等を通じて適切な分析方法を身につけさせていく必要がある。

また全国高校生フォーラムなど、英語での質疑応答がある場面では、即興性が求められる英語のやりとりに対応するだけの英語力が求められる。グローバルスキルトレーニング等を通じた国際塾の日ごろの活動でもこの場面を教員、生徒双方が意識して取り組む必要がある。更にはこうした国際塾の活動が国際塾の枠を超え、操山全体の英語に取り組む意識の向上へ寄与していくべきだと強く感じるところである。